

中国の「老年大学」と学生の実態に関する研究
—「重慶市老年大学」の事例—

馮 鷹 丸山 富雄

キーワード：老年大学、 社会階層、満足度、中国重慶市

The actual conditions of “Senior College”
and its student in China
—A case of “Senior College” in ChongQing City—

Ying Feng Tomio Maruyama

Abstract

The research of this study aims at analyzing the situation of the Senior College in China, and investigating the actual situation and opinion of students at “the ChongQing Senior College”. Through the analysis of 201 students, the following conclusions are drawn.

1. The students at Senior College are who belong at one of the highest society.
2. “To make good use of the life” and “For the health” are key reasons in the decision to the Senior College.
3. The relationships with the classmates are satisfactory among the students.
4. The activities in the Senior College are also positively extended to the society by almost all students.

Key words : Senior College, social stratification, degree of satisfaction, China ChongQing

1.はじめに

中国では、1979年の改革開放以来、経済の発展とともに、人口高齢化の趨勢もだんだん目立ってきた。中国の人口の高齢化の特徴は、①規模が大きい。2005年末の60歳以上の高齢者は1億4400万人に達している。②速度が速い。高齢者人口は1982年には総人口の5%だったが、18年後の1999年には10%に急増している。③地域間のアンバランス。高齢化が東から西に向かって伸びている特徴がある。上海は1979年に人口の高齢化に最も早く突入し、最も遅い寧夏は2012年でその差は33年もある。④都市と農村の格差。農村の高齢化水準は都市より1.24ポイント高い。⑤社会が豊かになる前に高齢化が訪れた。中国の1人当たりの国内総生産(GDP)は1000ドルを超えたばかりだが、先進国が高齢化社会に突入する時のGDPは一般的には5千~1万ドル以上となっている。中国政府はその急増する高齢者の学習ニーズに対して、老年大学をはじめ、様々な高齢者向けの事業を行っている。

本研究では中国における高齢者教育の事業、特に老年大学の歴史と現状を概観し、それが社会に果たす意義等を検討する。さらに重慶市老年大学生の社会階層や入学目的、効果、さらにはスポーツに関する実態等を調査し、彼らの意識や実態などを明らかにすることを目的としている。この調査や研究によって、在学生および卒業生による一般市民への啓蒙活動の成否を推測することもできること、さらには老年大学の設立やそこでの学習を通じて、高齢者の有する経験や知恵による社会活動や社会参加を支援し、高齢者の生きがいやQOLを高めることを実証したい。またこのことは高齢社会先進国である日本社会にも何らかの示唆を与えることができると予想される。

2.中国における高齢者教育の現状

中国の年齢構成はもはや高齢化段階に入り、高齢者事業と教育問題は重要な課題となった。高齢者の教育は中国の特色である社会主義文化の一つの重要な部分であり、その発展は論理的、道義的に要求されるだけでなく、社会の進歩を促進し、民族全体の素質を高め、さらに国民全体の発展に寄

与するための重要な手段でもある。高齢者教育は、将来、中国における教育の主要な主題になると予想されている。現在はその予兆的段階で、全国各地で高齢者への学習支援事業・生きがいづくり事業の実践が数多く展開されるようになってきている。

高齢者の知識教育を発展させることは高齢者の精神的文化的な生活レベルを向上させる上で必要なことである。中国は高齢者向けの文化教育事業の発展を重視し、高齢者の精神的文化的な生活をより豊かにし、彼らのニーズを満足させる事業を積極的に行っている。

大中都市には、施設が完備し機能がそろった総合的高齢者活動センターを逐次設立し、県(市、区、旗)には高齢者文化活動センター、郷(鎮、街道)に高齢者活動ステーション、末端組織の村(住民)委員会に高齢者活動ルームを設置してきた。2005年末現在、都市と農村の高齢者文化・スポーツ活動施設は67万カ所を上回るようになった。各クラス政府は、既存または増築した公益的文化施設の中に、高齢者が活動できる場所を増設し、関係部門の管轄する文化活動施設も高齢者への開放を積極的に推進している。国の財政にサポートされる図書館、文化館、美術館、博物館、科学技術館などの公共文化サービス施設および公園、庭園、観光地などの公共文化活動の施設も、高齢者に対して、入場料無料または優遇価格で開放することにしている。高齢者の社会文化生活の環境も絶えず改善されている。

さらに国は高齢者に合った精神的文化的商品積極的に提供している。中国共産党中央ならびに省クラスのラジオ放送局、テレビ局は高齢者向けの番組またはコラムを開設している。2005年末現在、全国で刊行された高齢者向けの各種新聞は24種、発行部数は280万部、雑誌23種、発行部数は305.8万部に達する。文芸、映画・テレビ、演劇と出版界は高齢者に喜ばれる文芸作品を多く創作している。各クラスの文化部門は演芸団を組織し、末端に赴いて、高齢者の人気を集めることのできる文芸作品を創作し、公演している。高齢者の心身の健康に有益な様々な文化娯楽活動を提唱しサポートし、また、毎年、国の財政から特別支

出金を振り向け、全国高齢者文芸公演、中国高齢者コーラス祭などのビッグイベントの開催をサポートし、高齢者の国際文化芸術交流をくりひろげている。

全国各地では、多種多様な健全かつ有益な高齢者文化活動が常に企画されている。大衆文芸館、文化館、文化ステーションなどの公共文化機関は高齢者の文化活動への指導に力を入れ、数多くの高齢者のアマチュア文芸中堅活動家を養成し、この人たちは高齢者の精神的文化的生活を活発化させ、充実させる面において、重要な役割を果たしている。都市と農村の高齢者の文芸活動の組織などが急速な発展をとげ、高齢者の大衆的な文化活動の中核となっている。

中国における高齢者向け教育の中心は各地に設立されつつある「老年大学」である。中国において最も早く設置された老年大学は、1983年に山東省で創設されたものである。老年大学の講座は多様で、「文史外国語」「書道」「中国画」「家政、撮影」「健身」「中医」「音楽」「ダンスと中国戯曲」「コンピューター」などの専攻になっており、さらにそれぞれの部門で受講生の要求にあわせた内容・レベルの専攻が工夫されている。受講生の受講年限は定められておらず、お金を払えば、いつまでも通うことができる。現在では全国に26,000校が設置され、また様々な形態の老年大学が設立されている。

3. 重慶市高齢者教育と「重慶市老年大学」の概要

重慶市はローマ字表記 Chongqing、略称渝(Yu)。揚子江の上流、四川省の東南部、四川盆地の東南部に位置している。北緯28度(奄美大島とほぼ同緯度)～32度、東経105度～110度。面積は北海道より僅かに狭い82,400平方キロメートル、人口約3,130万人、65歳以上の高齢者は10.9%(2006年)を占める。直轄市として19市区、17県、4自治県を管轄する。

重慶市における高齢者教育の形態には大きく次の三つがある。

①市老幹部センターにより創設された「老幹部大学」

各級政党から退職した老幹部を対象にし、政府から経費の支出がなされる学校である。この老幹部大学は立派な施設と設備を持ち、

授業もきちんと定期的に行われており、授業の質も保たれている。しかし、この種の学校は数が非常に少なく、重慶市には1校「重慶市老年大学」のみであり、普及性と普遍性に欠けている。

②区により創設された「高齢者大学」

対象とする学生は幅広く、また政府からも一定の資金が投入されていることから、授業の場所やクラスも比較的固定されており、その質も「老幹部大学」に比較すると劣るが、相対的には保たれている。しかし、すべての区にこの種の学校があるのではなく、重慶市全体で10校程度ある。

③社区文化施設と社区サービスを融合した高齢者教育機構

広範な市民を対象とした教育機構である。社区における文化施設を有効に利用した高齢者教育で市の多くのところで実施されている。したがって、このような高齢者教育は極めて大きな普遍性と普及性を持っている。その経費のルートは様々であるが、主に住民や企業からの募金によっている。ほとんどの教師はボランティアである。確かに、このような高齢者教育機構は、その施設・設備・内容において、老幹部大学や区の高齢者大学に及ばないが、多くの市民を対象としている面で評価される。

重慶市における老年大学の課題としては次のことが指摘できる。

①各級政府、部門における高齢者教育の戦略的意義に関する認識不足

重慶市には、現在まで高齢者教育に関する運用条例がまったくない。したがって老年大学は前述のような様々な形態が存在し、統一・統制が採れていない。すなわち老年大学の意義や目的、施設や設備の基準、授業の内容、さらには指導者資格などがほとんど整備されていないのが現状である。各級政府・部門の間では、高齢者教育が重要な議題として上ることは少なく、特に末端機関である町内の政府係員の高齢者教育に対する認識は非常に希薄で、高齢者教育を展開するための自覚に欠けている。

②全体をうまく計画案配できる主管部門がないこと

高齢者教育の政府主管部門は名義上では重慶市高齢者委員会であり、具体的な仕事は各区の高齢者に責任が負わされている。

しかし、各区の高齢者委員会はその仕事内容に関し下部の町内の高齢者教育委員と意思疎通があまりできていない。つまり、政府の機関として、高齢者教育全体をうまく計画案配できる主管部門が欠落しているといえる。

③費用、場所が極めて不足していること。

具体的な老年大学の運営に関して言えば、その費用や場所が絶対的に不足していることが挙げられる。特に費用の問題は老年大学の需給格差の根本的な原因となっている。市老幹部大学のすべての教師は他の学校から招聘した人である。

調査対象校である「重慶市老年大学」は、1986年3月、重慶市の政治、経済、文化の中心である渝(yu)中區に設置された。20種類程度の専攻が揃っている。29クラス、在學生は1,329人である。昨年からは大学院生の募集も始まった(書道、国画と写真のクラス)。一クラスは生徒40人から50人ぐらい、学費は専攻に応じて、半期250元(4000円)、100元(1600円)、80元(1280円)の3種類である。一回の授業時間は2時間半で、通年の授業時間は100時間である。「重慶市老年大学」は前述のいわゆる「老幹部大学」であることから、募集対象は、重慶市の48歳以上の定年退職の公務員、国有企業の管理職務担当者たちである。重慶市政府は毎年50万から60万元を補助している。

4. 重慶市老年大学生の実態と意識

1) 研究方法

(1) 調査対象者

重慶市老年大学の在學生、健身部2クラス96人、ダンス部1クラス50人、風采(優雅な風貌、物腰、態度、文芸の才能などを育てるクラス)部1クラス58人、計204人を対象とした。

(2) 調査の時期および方法

2007年3月5日、6日に、老年大学においてスタッフや教授、學生などを対象に予備調査を行った。2007年6月11日から一週間にわたり、対象クラスへの全数調査によりアンケート調査を行った。

(3) 回収数および回収率

有効回収数は201通で、有効回収率は98.5%である。

(4) 調査内容

- ア) 対象者の属性(6項目)
- イ) 対象者の社会階層(7項目)
- ウ) 対象者のスポーツ実施の状況(3項目)
- エ) 大学受講状況(4項目)
- オ) 入学の目的(7項目)
- カ) 入学後の効果(7項目)
- キ) 入学後の満足度(5項目)
- ク) 今後の意向(2項目)

(5) 分析方法

性別によるクロス集計、ならびに平均値による比較(t検定)によって分析した。

2) 結果

(1) 対象者の社会階層

日本の「社会階層と社会移動」(social stratification and mobility)—いわゆるSSM調査—研究では、社会階層を職業、教育(学歴)、所得の基本的地位変数と財産、生活様式、勢力の補助的地位変数の6変数から階層的地位として捉える枠組みを設定している。本研究においてもSSM調査を参考に、学歴、(前)職業、所得(定年前収入・定年後収入)の基本的地位変数、および生活様式について調査を行った。

① 学歴

	高校	大学	修士	博士	計
男	1 1.4	62 87.3	7 9.9	1 1.4	71 100
女	32 24.6	95 73.1	3 2.3	0 0.0	130 100
計	33 16.4	157 78.1	10 5.0	1 0.5	201 100

老年大学の学生の学歴は、男女とも大学卒が最も多く、大学卒以上では男性は98.6%、女性は75.4%を占め、学歴の高い學生がほとんどである。

② 職業

	公務員	企業幹部	学者	経営者	計
男	30 42.3	37 52.1	4 5.6	0 0.0	71 100
女	23 17.7	101 77.7	2 1.5	4 3.1	130 100
計	53 26.4	138 68.7	6 3.0	4 2.0	201 100

定年前の職業をみると、全体では公務員と国有企業幹部が95.1%を占め、その他は学者や経営者であり、全員が職業威信の高い職業経験者であった。女性は企業幹部経験者が大半を占めた。

③ 所得

	1000元以下	1001元-2500元	2501元-4000元	4000元以上	計
男	2 2.8	49 69.0	18 25.4	2 2.8	71 100
女	11 8.5	74 56.9	40 30.8	5 3.9	130 100
計	13 6.5	123 61.2	58 28.9	7 3.5	201 100

定年後では「1,001元～2,500元」が60%を超えている。重慶市統計局のデータによると、一般的な市民の月收入は1,200元であり、老年大学生の収入は定年前後ともに、一般的な市民の収入よりかなり高いと考えられる。

④生活様式

SSM調査では、生活様式の判定に、いわゆる文化的な生活様式の享受を意味する余暇生活機会の多寡ということから、「映画をみに行った」などの9項目の余暇活動の指標を用いている。本調査においても、これらの指標を参考に7項目の余暇活動について調査を行った。SSM調査では、各項目の「かなりある」を2点、「少しある」を1点、「ない」を0点に得点化し、9項目の合計から生活様式スコアを次のように類型化している。

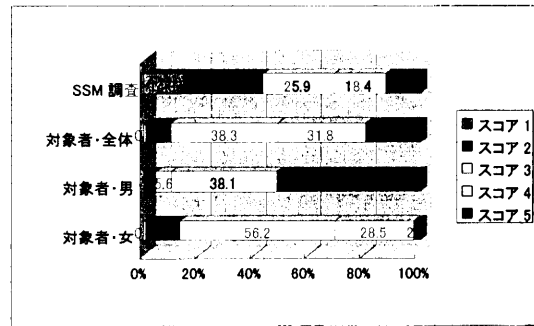
SSM調査における生活様式スコアと構成比

生活様式スコア	得点	構成比
1	0-1	14.3
2	2-3	28.8
3	4-5	25.9
4	6-7	18.4
5	8-18	12.6

本研究においてもこれを援用し、次のように階層化を図り、その構成比を算出した。

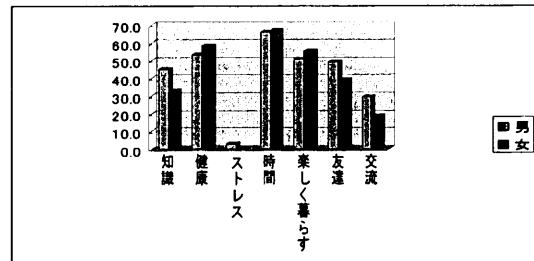
本調査における生活様式スコアと構成比

生活様式スコア	得点	構成比		
		全体	男	女
1	0-1	0.5	0	0.8
2	2-3	9.5	4.2	12.3
3	4-5	38.3	5.6	56.2
4	6-7	31.8	38.1	28.5
5	8-14	19.9	52.1	2.3



日本との比較から単純には言えないが、今回の調査対象者の生活様式は全体でもかなり高いことが分かる。特に男性では生活様式スコア5の人が半数を超え、非常に高いといえる。

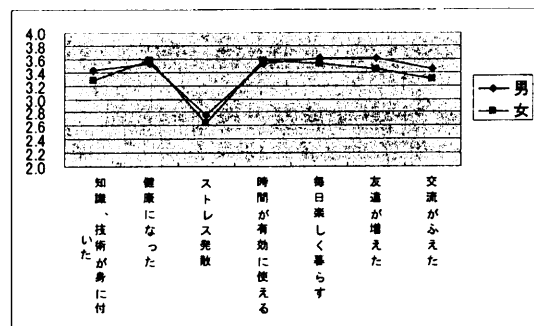
(2) 入学の目的



入学の目的をみると、「時間が有効に使えるため」を挙げた者の割合が全体で66.7%と最も高く、以下「健康のため」(56.7%)、「毎日楽しく暮らす」(53.7%)、「友達が増えるため」(42.8%)、「知識、技術を身に付けるため」(37.3%)、「交流」(22.4%)、「ストレス発散のため」(1.5%)の順となっている。

性別でみると、「友達が増えるため」、「知識、技術を身に付けるため」と「交流」で男性が高く、男女で10ポイント程度の差が見られた。

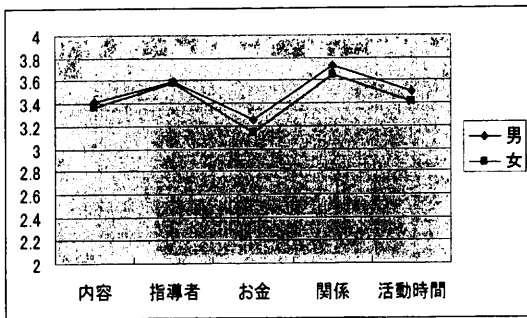
(3) 入学後の効果



入学後の効果に関しては「非常にある」を4点、以下「全くない」を1点と得点化

し、平均値を算出した。その結果、「ストレス発散」以外の項目で「あまりない」、「全くない」がほとんどなく、かなり高い効果があったことが分かる。「ストレス発散」に関しては、入学の目的でもほとんど指摘がなく、その効果も他に比べ薄いことが分かる。男女ともにほとんど同じような傾向を示しているが、「知識、技術が身についた」、「友達が増えた」、「交流が増えた」の3項目の平均では男性が高く、統計的にも5%レベルで有意な差がみられた。

(4) 満足度



入学後の満足度に関しても4段階尺度による平均値によって比較した。「活動の内容」、「指導者」、「お金(学費、学校外の活動経費など)」、「クラスメートとの関係」、「活動の時間」の5項目による、入学後の満足度では、「お金」以外ではほとんど不満はみられず、かなり満足度は高い。特に「クラスメートとの関係」(4点満点で平均3.68)は非常に高く、仲間と楽しく交流をしつつ大学生活を送っていることが分かる。「お金(学費、学校外の活動経費など)」の項目の満足度がやや低いが、平均値は3.18と中央値の2.5を超え、この種の調査では満足度は高い方といえる。また男女ともに同じような傾向を示しているが、全ての項目で男性の方がやや満足度は高いことも分かった。

(5) 地域での活動状況と今後の意向

今回の調査対象者のほとんどが、現在大学で受講する活動を、大学以外の地域においても、指導者としてあるいは個人的に積極的に行っていた。また93%の人が今後もその活動を続けるという意向を示している。

3) 考察

(1) 老年大学生の社会階層

老年大学の学生の社会階層を、日本のSSM調査を参考に学歴、職業、所得、生活様式から測定したが、いずれの指標ともに高く、今回の調査対象者の社会階層は中国社会の上層の人々であることが分かった。

この結果は、この「重慶市老年大学」が党や国有企業の幹部の退職者を対象とした「老幹部大学」であることから当然の結果ともいえる。

(2) 高齢者の学習ニーズと社会関係

高齢者に特有の学習的ニーズに関して、三輪(2006年)は次のニーズを指摘している。

- ①対処的ニーズ：高齢者が社会生活をいとなんでいくうえで最も重要となるニーズで、高齢期におけるパワーの低下に対処することがその焦点となる。
- ②表現的ニーズ：活動それ自体の中に見出される喜びへのニーズである。ここではわれわれの自然な身体的能力の健康的な表現は、幸福感につながると考えられている。
- ③貢献的ニーズ：他者や地域のために役に立つ活動に参加し、これらに貢献することで、まわりから認められたいというニーズである。
- ④影響的ニーズ：自分の生活環境により大きな影響力を与えたいというニーズである。
- ⑤超越的ニーズ：身体的パワーや余命の減少という制約を乗り越えたいというニーズである。

このようなニーズによって様々な関係が形成されが、最も注目されるのが高齢者の友人関係である。これについて、三輪は以下のように述べている。

「社会老年学の領域では、人は高齢期を迎えるにつれて、その欲求の比重が、達成ニーズから親和的ニーズへと移行するという指摘がある。また一方で、1) 高齢期の生活満足度と親友の存在とは密接な関係にある。2) 親友は、高齢期のストレスに対する緩衝物にもなっているという指摘も出されている。これらの指摘を受け入れるならば、高齢者の学習ニーズや教育実践の問題は、学習者の人間関係や友人関係という文脈からも検討される必要があるということになる。」

また老人大学でできた友人数と受講後の満足度の間には、正の相関（友人数が多いほど満足度が高い）があるという調査結果も紹介し、高齢者の学習の場における仲間づくりの問題は非常に重要な問題であると指摘している。

今回の調査対象者の場合、大学への入学の目的では、「友達を増やす」や「交流」の項目にはそれほど高い値は示されなかった。しかし、入学後の効果ではこの2項目は非常に効果があったと指摘され、さらに満足度では「クラスメートとの関係」に最も高い満足度が示された。

これらの結果から、今回の老年大学では良好な人間関係や友人関係が構築されていること、そしてそのことが三輪の指摘するように、他の項目でも満足度が高いことに繋がったと考察できる。

(3) 地域活動と啓蒙

今回の調査対象者のほとんどが、現在大学で受講する活動を、大学以外の地域においても、指導者としてあるいは個人的に積極的に行っていた。また約93%の人が今後もその活動を続けるという意向を示している。

老年大学では、「知識を増やし、生活を豊かにし、情操を陶冶し、健康を促進し、社会に奉仕する」という趣旨が謳われているが、特に「社会に奉仕する」ということに関して、調査対象者は現在および将来にわたりそれを実行する可能性が極めて大きいといえよう。前出三輪の「貢献的ニーズ」に当たるもので、老年大学はこの面でも大きな機能を果たしている。

5. 結論

①今回の重慶市老年大学の調査では、その対象者は年齢を見ると60-69歳が72.7%を占め、60歳代が大半である。男女比では女性が男性の約2倍になった。社会階層は中国社会の上層の人々である。また対象者は男女ともに定年後のスポーツ実施率が増加していることが分かる。一般的な市民より健康や運動に対し、かなり意識の高い人々と考えられる。現在行っているスポーツ種目を調査したところ、ウォーキング（98.0%）、ダンス（65.2%）、体操（64.2%）、気功、太極拳（35.8%）などが上位にあげ

られた。

②重慶市老年大学生の入学目的については、「時間が有効に使えるため」を挙げた者の割合が全体で66.7%と最も高く、以下「健康のため」（56.7%）、「毎日楽しく暮らす」（53.7%）、「友達が増えるため」（42.8%）、「知識、技術を身に付けるため」（37.3%）、「交流」（22.4%）、「ストレス発散のため」（1.5%）などの順となっている。入学後の効果について、目的の項目と対応させたところ、「ストレス発散」以外の項目で「ない」がほとんどなく、かなり高い効果があったことが分かる。「ストレス発散」に関しては、入学の目的でもほとんど指摘がなく、その効果も他に比べ薄いことが分かる。「交流」「知識」「友達」の3項目はその効果が目的以上に上がっているといえる。男女ともにほとんど同じような傾向を示しているが、「知識、技術が身についた」、「友達が増えた」、「交流が増えた」の3項目の平均では男性が高く、統計的にも5%レベルで有意な差がみられた。

「活動の内容」、「指導者」、「お金（学費、学校外の活動経費など）」、「クラスメートとの関係」、「活動の時間」の5項目による、入学後の満足度では、「お金」以外ではほとんど不満はみられず、かなり満足度は高い。特に「クラスメートとの関係」（平均3.68）は非常に高く、仲間と楽しく交流をしつつ大学生活を送っていることが分かる。「お金（学費、学校外の活動経費など）」の項目の満足度がやや低いが、平均値は3.18と中央値の2.5を超え、この種の調査では満足度は高い方といえる。また男女ともに同じような傾向を示しているが、全ての項目で男性の方がやや満足度は高いことも分かった。

③今回の調査対象者は、現在大学で受講する活動を大学以外の地域においても、指導者としてあるいは個人的に積極的に行っている。また93%の人が今後もその活動を続けるという意向を示している。

この研究や調査によって、中国における老年大学は在學生、すなわち高齢者に多くの満足感を与え、特に仲間との交流をとおし生きがいやQOLを高めることに寄与していることが実証された。また老年大学は、まだまだ課題も多く存在するが、在學生やその卒業生が地域リーダーとして、地域の

高齢者を指導するシステムに大きな役割を果たしているといえる。

6. 日本社会への提言

日本は中国に比べ高齢化率は高く、2007年には65歳以上の高齢者は全人口の20%を越えた。日本においても生涯学習や介護予防等、様々な中高年齢者対象の事業が行われている。

中国の「老年大学」と同様の機関や組織として、日本では、自治体や大学におけるシニア向けの開放講座や民間のカルチャーセンター等がある。しかしこれまでの日本の事業の多くは、単に高齢者の学習欲求に応えるためのものであり、またその開設は民間の営利目的や自治体や大学等の自主性に任されたものであった。国情は違うが、中国が国家施策として「老年大学」を積極的に設置し、在学生の学習欲求や生きがいづくりに寄与するとともに、在学生や卒業生が他の高齢者を指導するという社会還元システムは、日本においても大いに参考となるものではないだろうか。

仙台大学において、2007年より始まった「シニアカレッジ」は、中高年齢者を対象に「地域スポーツ指導者コース」ならびに「地域ヘルスケア・パートナーコース」として、地域の指導者養成を意図したものである。今後このような高齢者が高齢者を指導するシステムが多く機関で設置されることが望まれる。そのためにも、国が今以上に積極的に関与するなど、中国の「老年大学」の政策も参考となると考えられる。

7. 今後の課題

本研究では中国重慶市の老年大学を事例として、大学の実態と在学生の社会階層などについて調査を行った。しかし、この研究を通していくつか課題が出てきた。一つは論文作成前の先行研究の収集や検討が少なかったことである。特に日本語の能力の関係もあり、日本の文献をもう少し読む必要があった。また中国における老年大学に関する先行研究や文献についてももう少し検討を加える必要を感じた。さらに本研究の調査対象者は限定されており、今後、老年大学の他分野の学生や、他の老年大学の学生を対象とした研究を続けたいと考える。

引用・参考文献

- 1) 堀 薫夫、三輪建二 (2006年) 「生涯学習と自己実現」放送大学
- 2) 丸山富雄 (1989年) 「わが国における階層構造とスポーツ参与の研究」昭和62・63年度文部省科学研究費(一般研究C)研究成果報告書
- 3) 丸山富雄 (2000年) 「現代スポーツ論」中央法規
- 4) 富永健一 (1979年) 「日本の階層構造」東京大学出版会
- 5) 仙台大学シニアカレッジパンフレット, 2007年
- 6) 重慶市老幹部局「重慶市老年大学七年発展計画」2003年
- 7) 中華人民共和国国務院「全民健身計画」1995年
- 8) 「人民网」2006年12月版
- 9) 「中国人口高齢化発展予測」2006年
- 10) 中華人民共和国国務院報道弁公室「北京週報」(日本語版) 2006年10月版 www.bjreview.com
- 11) 中国情報局ホームページ seachina.ne.jp
- 12) 羅淑芳 (2001年), 論老年教育の弁学宗旨と培養目標, 『重慶市老年大学建校15周年専刊』
- 13) 陸三川 (2000年), 針對老齡群體的特點發展老年教育, 『重慶市老年大学建校15周年専刊』
- 14) 潘隆安 (2004年), 老年心態與老年教育, 『重慶晚報』
- 15) 王明中 (2003年), 「簡論老年大學書道教育的三個(三結合)」『中國老年報』2003年11月版
- 16) 重慶市統計局 (2006年)
- 17) 龐存周 (2001年) 「関予編選(老年大學文科教科書)的設想」『重慶日報』2001年12月15日版
- 18) 万寒俠 (2000年) 「指導閱讀賞析 培養寫作技能」—古代詩詞曲教學縱橫談, 『重慶市老年大学建校15周年専刊』